シンポジウム

グローバル人材教育と英語ヒエラルキー
—公務を中心とした国際実務経験と大学教育の実践からみて—

宮　崎　修　二

筆者は、大学の政治経済学部を卒業後、通商産業省（現経済産業省）に入省。米国の大学院で経済学修士号を取得後、国際機関外交官としてAPEC（アジア太平洋経済協力）事務局に勤務、ODA（政府開発援助）に関するOECD（経済協力開発機構）や二国間でのやり取り、WTO（世界貿易機関）における貿易紛争処理などの国際交渉を経験した。また、大学学部生を対象としたNews Englishの講義を退官後も２２年間にわたり行った。さらに非営利国際奉仕団体であるキワニスクラブの日本地区ガバナーとして国際会議に参加、加盟各国の幹部等と日常的なやり取りを行っている。

以下、些少ながら、公務を中心とした国際実務経験と大学英語教育における実践から得た知見と所感をまとめたい。

(1) 海外渡航も夢だった中学生として英語を習い始めた筆者は、学部時代、就職、留学時代と英語力の習得に努めてきたが、APECの国際会議に初参加した時、各国代表の様々な発音やイントネーションの英語に衝撃を受けた。当初は何の議論かも良く解らなかった。だが、問題は英語力そのものではないことも悟った。討議内容のサブスタンスへの理解があれば、自然と英語も頭に入り、発言もできる。例えば、「英語が上手いからといっても良い商社マンとは限らない、必要なのは商売人としてのセンス」という元商社マンの方のお言葉には納得できるところがある。

(2) 外交官や公務員、国際機関職員など、対外交渉にあたる人々にとっての英語コミュニケーションに特化すると、英語もさることながら、伝えるべき中身が大切ということがここでも指摘できる。彼らに求められる能力は以下のようにまとめられる。

➢ 一般的能力
- ・予備的フェーズで得られる…一般教養、「他」文化への理解、時事問題への知見と分析態度（i.e. なぜ？）
- ・実務経験フェーズで培われる…専門知識及び理解力、重要課題への問題意識
- ・両フェーズで鍛えられる…交渉力(戦略的思考、ゲーム)、社交性、常識

➢ 英語能力
- ・予備的フェーズで得られる…論点を整理し、主張すべき点を英語で表現する能力
- ・実務経験フェーズで培われる…サブスタンスの知識と理解力（e.g.国際会議）
- ・両フェーズで鍛えられる…英語能力は「多多益益弁ず」、反復による自信の醸成、世界を見ればnon nativeの英語が主流、堂々と、「腹」をくくって

(3) 実務経験と英語教育経験から見た、大学教育で行うべき英語能力の涵養方策

➢ 論点を整理し、主張すべき点を英語で表現する能力の涵養
- ・特定テーマについての主張を英語でまとめる

・自分で口に出す、友人と話し合う、クラスで発表する

➢ 素材としての時事英語の活用

・英語ニュースの視聴、ディクテーション、ニュースの意味、背景事情の探索、討論

➢ 場数を踏ませ、自信と「腹」を養う

(4) 筆者の経験に基づく若干のエピソード

➢ 留学時代

・経済学の授業は、ただ黙々と講義を聴くだけ。残念ながら、1 年経っても話す力は付かない。ネイティブとの議論をして、初めて実力がつく。

・英語家庭教師(大学の英語学教師)に「ニュース週刊誌」の記事を自分で選び、話したい内容を自分で考えて、議論を吹っ掛ける。例えば、「日本が米国の 51 番目の州ならば、貿易摩擦は起きないのでは？」とか。

➢ 国際機関勤務時代

・昼食時、外国政府派遣の同僚は日本について繰り返し質問してくる。例えば、TV で見た「SHOGUN」を素材に、日本人である当方が当然知っているものとして事細かに尋ねる。当方は、戦国・江戸時代の日本の政治・社会状況について解説しなければならない。国際常識では、自国の文化歴史を話せない人間は評価されない。

・米国のテレビ映画やポピュラーソングについての話題で盛り上がる。日本人がなぜそんなに米国文化に詳しいのかと、驚かれる。「我々は宇宙人ではない！」